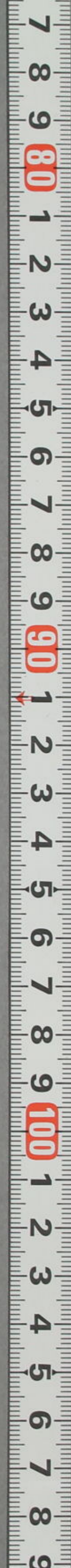


心正筆法論

六



六ノ内

個人研究費
雲英末雄
58- 4163

文章をかき宛所をわきと先宛所を
出さるゝのら文章をうきと二名なり
文言りかふ近きと上首と下人といふ
りといふの事とて師に傳受す

制札之事

禁制

- 一 軍場甲し人か能入振籍之事
- 一 振籍採竹木事
付前田富作色事
- 一 相懸
非分課役
六錢無振并
事
以内一各に

右條堅固傳心早若有毒犯
強者速亡彼處嚴科也仍下知如件

永祿十年九月日

美濃守藤原朝臣

右より判れし名案と不立し
片も氏と明最つる判形なり

一 自然真字とみねいひに立取なりとも
か

まんさ

たうり

一 ちりいり事

一 ちりいり事

一 ちりいり事

一 ちりいり事

一 ちりいり事

右條一事よりいふ相をいふ

ともうあるかきくけみおれ

一也仍下知如件

年月日

中氏在判

一 所ふかやうなりとも一は故実
其ヶ際ある事ふくへき也

一 堅板横板の事 制れ高ゆゑ名ゆゑ
分堅板其志を速成られしは横板
なり 口傳然とも制れしは高ゆゑなり
ヶ際ある事ふくへき也 堅板なり
少くとも板ありし事 是は式の外
一定 掟 高札 法度
右名目よりある得との外は極多

これとある事ふくへき也

一 進上地請取書振の事

一 納戸 所要脚の事

合印千文者

一 右の安東但馬守殿進上納戸の件

年月日 名字片名案を判

一 宛所不き文鉢なりふある事

一 方刀目録の事

一 極敬なり方刀折所小名案なり

第一寸みともくともて、真ふかきてしる
 乃己の字もい乃字本意とも思なり
 一太刀折角をわくうふちり参議らと
 かりて
 一太刀をわくみ極家ともふけしとサ
 ち富かき事少身者平侍の第一乃心
 得なり
 一字をばとみ外す法なりとふかき家なり
 是と大概の心得なりと傳すなり

進上

御太刀 一腰 有銘と銘をのりて

かき無銘なりと持と

御馬 一疋 いふ字をいふ

いふ

名字一疋

名案

下

二下

右主人貴人止極乃や海にたふふと
乃うきやふき事なる

沛老刀 一腰

沛馬 一丈

望

名字一丁

是も崇敬が右乃分小進と名乗る

のときん沛乃字行但當時是
と小字ふて用我於師説と受て

沛老刀 一腰

沛馬 一丈

望

右極別も是も小字なるが當時も
名字中無くと應外に跡と人々ある

但近江小笠原共部古跡殿ト細川
越中守殿トくろくまの古様所恒々
一滝ト 是曾我尚祐殿所
一金銀島目より外印小高も遠く入
時と右刀と馬との間よりけりて

流右刀 一腰

馬

一疋

是も本軍のせいやとてこの分より
うやゆいなり

右刀

一腰

馬

一疋

家来の者より頼来田来舞とおへ
りかきねれりともうへし時と馬と
るともてなり

注文之事

遠上

照子

百卷

唐筵

百枚

丁子

百斤

各字下名案

主人（？）の分府の末等へもまゝとて名案
をうきし料所へゆきし引合南と松
原もとりり極（？）なるわらゝき案なり

目録之事

遠上

白鳥

一番

厂

二

翔

一折

鱈

一朽

海月

三桶

上

各字下名案

信ありてありき

右主人へのあてし書はもとねと違ふ
実名不ふきじりと精進のふき入
近しと相和ぬ所なる中へと右乃
越えふふふふふふふふ

一目保は又ふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふ
せぬのなり又負教のふふふふふ
字ふふふ一二とふの字なりふふふ是

故宮作

折所乃事

違ふ

万文

名字下名義

右主人貴人へのあてし書はもとねと違ふ
と実名をかりと下字へと万文といふなり
万文乃字折所の中央よりなり

一島目乃多打少小可所之千之万之と
いふ少くも之と多く少れり可之可也
青銅 青鉄 福月なり是名とて之
事なり

元和四年七月日 曾我氏互判

右一冊者曾我尚祐殿以二階臺
行二大節常與あり内々之は校
梓之書當沛代書用之秘也

予書写之而深垂藏函底と記
筆法論二卷之引刻千梓為童
蒙之重寶猶別増補所見関
之書式而且仿猪尾者也蓋
不欲獨樂而可謂与人偕乐
之志乎矣

於千筆記堂跋之

一 御教書立紙を授けたまふと大に折紙
かの古留紙に代は紙に達如件或紙解
めはとてまゝ立紙の時とて月日書續
とて折紙の時と付て御教書乃
時々御名案とせし書ふて更領し
しめて判形最有し奉るの時を案し
判形ありとせし

一 三職にあらざる者なるもの違ひに相
ふりて多かき事、内宿所とてとてし

事勿論なり又人よりおかしき事と相
ふりて

一 三職と武所 富山 細川 中津の
三職なりとも武衛乃中事、一は書解
乃心勿論なり

一 四職と山名 了義 赤松 赤松乃
四職の事なりとも三職に付て相
ふりてある事、餘あり
於人より四職一は同事なりとて

有く傳ふ武建境のしと烟事多
く

一 事といふ字はるふもはくしと事
めふゆふもはくしと事と云ふ
りては平人などかきと

一 今といふ字是も賞観なる事といふ
心得るはるふも右ふりし有く傳
一 公家方と云ふはしは取らるふも
と云烟といふのかは主得るもといふ

かの武家といふもはくしと事
心得るはるふも右ふりし有く傳
武家といふは相ふはしと事といふ
かやふりふもはくしと事といふ
有別候といふ

一 武家といふは稱号と名字といふ
名字といふ公家といふは名字と
名字と名字といふは是はくしと事
遠くのかきと事といふ

一陳中へ乃文とてお坐あうとて陳所と
てまの秘かきうもとて陳所のまて
とてしうとて陳所同前がわ

一しうとて陳所とてしうとてしうと
極位のとて陳所とてしうとて直小獻と
とてしうとて陳所とてしうとて陳所
一相とてしうとて陳所とてしうとて
一陳所の事とて陳所とてしうとて
とてしうとて陳所とてしうとてしう

居所或も居城の事とてしうとてしう
一とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと

一陳所の事とて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと
とてしうとて陳所の事とてしうと

衣乃名をききてしるす人なりが事勿論
なり

一 女中より干物なりある世より女中にして
廻るおひうなりが事なりしものあり
とてある人なり

一 一字より振る事

一字より儀蒙作種々無斟酌の
余儀内理よりいふ事 或は其を代用
未長と字と違ひ或は違入の或は

信用の

の性質なり或は信より

年月月

三村信濃守長勝判

吉良棋津守殿

今湯中

かものより調師板原を折角なり
所を授けしもの上包り右のいふ事
單より分別あり

一 書調振る事

着別下向人六十人 荷物と馬式下馬

十丈諸國渡其煩了と勸るゝ由
所々下知也似下知也件

九月月日

沙弥 立判

前丹後守源朝臣判

可なりとて立文を同を授ててと
りり上包有

一感如く立極事

と度於立極名合戦と何有教中計捕
得勝利と感感如く立極忠節を

比類の家子孫に傳ひて後

年月

九月十三日

貞勝立判

奈良一版

凡の趣なりと力被下なりと解なり
与力ありと少賞解つても勿論也忠節
の字小沛の字を如く一と解なりといふも
紙を板屋なりと解なりとてとていふなり
感如く立極第一の味なりとて末代

三

願書乃事

少

肉目

受顧氏實名在判

我知此乃多事之立願以趣其事也

あかひな

一
下遂乃事

後以涉信圖肝要以為律

年
八月日

名字
名案判

中村右近衛門尉殿

御宿

一目安事

小笠原大膳右史様白 言上

右少卿者と度知所分は得付らるゝ
及令に候被達事無異候に候に
付も御以迄に事有自に候御被達
似書上此件

天正二年十月日

凡そ様分がわあつと一牧立紙候に
儲上包直し上包小目安事なり
而しては謀とつと候に候に
一目安事なりといふと難字あり
様よりして物別目安事なり
而して候と云ふ候と候との目安事
小目録と云ふ候と候との目安事
而して候と云ふ候と候との目安事
すといふ候と云ふ候と候との目安事

一 折角の又を納めてふふ急げして世
の面と急ぐ事一あつた

一 披露の附のあつたあつたあつた
は省す預沛——とく故に二ふあは
とてかぬ

一 披露のあつたあつたあつたあつた
さけて宛面あつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた
(まがや)

一 文じい文いゆと封目あ急を長
く列事あ外あああああああああああ
ああああああああああああああああ

一 人前うてあが(ま)振と先すあああ
主人ああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ
文言とすああああああああああああ
ああああああああああああああああ
ああああああああああああああああ

一日付のけし奥不遠をわろり下すの
事なり

一 主人御判ありん河と云は申も折富を
判り取ともわたりてあつて但筆者のき
ふ筆ふ富と云ふ一きなりふの筆とて
御判とて極きなりふの御判とて傳
抄小判とて申上申下事、皆なりふ
上てと極とてなりふ一すふ、一ふ
なりふなりふなりふなりふなりふなりふ

寸好庵と下等人の多きを
 小市は坐てすぬある主人
 去人の在判
 と心づて

一和判とあるものなるを主署とりよる人
より人々の事なり是を随分の令
りちのひなり

一 杉板と料紙四丁折てその折目から

一 折衷と大の折衷といふ別の二つ

送保ともしくつゝ保は他國をのみふ
とくちの所をわきまとしてゐる

[illegible]

一
ぢいぬと一
牙とく
いさむ

一的一矢为一相之至之一相点重乃为万

一
妙くしらぬけうふたふたわらふとあふ
る

一 之抄小習と大習と兄弟習先より
くさかやう習とく習いとや先小
てきやふを中習のやう兄弟習のや
習とやうやうくくも先ふくくく
う級実事むかひ悔ふ常ふ考へ由
りて（ 狂師よきくく秘るなもくく
右筆職とやうく振くもく大書か

乃ゆく文学のこのむくをなす学問なり
の事ありあやうきなり

心正筆は端下終

右見聞之書武者小兰
原家曾我氏之記録之
抜粹也余竊以考異而
綴者芟之畧者詳之
是亦補世間童蒙一

助而已唯恐有書寫之
差落字之誤魚魯之疑
季請討其精要而使
是書歸正當者嗟予
爲後世一寶者也惜乎

今

聖天下文士禮者多摭
率落實不復道先生
家法塗轍季願得梓
而以廣其傳大庶不差

書式者卒其功始俟之

異目而已矣

筆花堂下

松永惟中跋

寬文第九歲_{己酉}仲秋吉旦

書肆二條通大恩寺町風月堂_梓行

